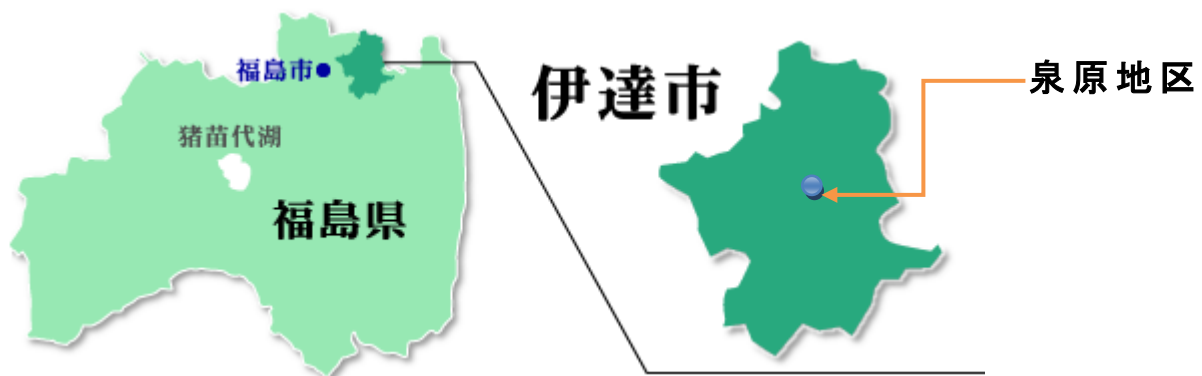


泉原地区の紹介

【泉原地区の概要】

泉原地区は、福島県伊達市のほぼ中央に位置し、市の中心部である保原の東に位置します。西に広瀬川、そして片貝山、北東に地区のシンボル鹿頭山、東を阿武隈の山々に囲まれた福島盆地と阿武隈山系の境にあたります。

地区には150戸、500名ほどが住んでいます。地区中心部は海拔70～90mのところのところに位置し、南東方向から北東方向に緩やかな平坦地で耕地に適しています。



【泉原地区の歴史】

泉原地区に人々が住むようになったのは、旧石器時代といわれています。地区の東側には縄文時代中期（1万2000年前）の集落跡、武ノ内遺跡があり、昭和61年に発掘調査が行われています。

平安時代末期には源頼朝の奥州攻めに従った常陸国の中村常陸入道念西（後の伊達氏初代朝宗）がその戦功により、この地区を含め現在の伊達市周辺を支配することとなりました。

南北朝時代には、南朝の北畠顕家が後醍醐天皇の皇子義良親王（後の後村上天皇）を奉じ、霊山を中心に陸奥の国府を多賀城から移し、一時的ではありましたがこの地域に王城を築きました。

また、同じ時期に日蓮宗泉原山蓮昌寺が建立され、江戸時代には日蓮宗では日本で唯一の餅柱を奉納する十三講会式が行われるようになり、祭りを賑やかにするため若者で祭り講が組織され、その後、蓮昌寺に隣接する番神宮を信仰する番神講社（いわゆる青年団）となり、祭りなど地域の融和と発展に尽力し、戦後は盆踊り、十三講祭礼を行う祭り青年団として、十三講会式とともに現在も続いております。